

令和7年木造建築士試験

問題集

学科Ⅲ（建築構造）

学科Ⅳ（建築施工）

次の注意事項及び答案用紙の注意事項をよく読んでから始めて下さい。

〔注意事項〕

1. この問題集は、学科Ⅲ（建築構造）及び学科Ⅳ（建築施工）で一冊になっています。
2. この問題集は、表紙を含めて14枚になっています。
3. この問題集は、計算等に使用しても差しつかえありません。
4. 問題は、全て五肢択一式です。
5. 解答は、各問題とも一つだけ答案用紙の解答欄に所定の要領ではっきりとマークして下さい。
6. 解答に当たっての留意事項は、下記の(1)及び(2)のとおりです。
 - (1)適用すべき法令については、令和7年1月1日現在において施行されているものとします。ただし、「脱炭素社会の実現に資するための建築物のエネルギー消費性能の向上に関する法律等の一部を改正する法律（令和4年法律第69号）、同法の施行に伴う関係政令の整備等に関する政令（令和6年政令第172号）及び同法の施行に伴う国土交通省関係省令の整備等に関する省令（令和6年国土交通省令第68号）」に基づく法令の規定については、令和7年4月1日現在において施行されているものを適用すべき法令とします。
 - (2)地方公共団体の条例については、考慮しないものとします。
7. この問題集については、試験終了まで試験室に在室した者に限り、持ち帰りを認めます。（中途退出者については、持ち帰りを禁止します。）

学科Ⅲ（建築構造）

〔N o. 1〕 木造建築物に作用する荷重及び外力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 多雪区域における長期に生ずる力とは、固定荷重、積載荷重及び積雪荷重によって生ずる力の総和である。
2. 住宅の居室における床の積載荷重は、一般に、「大梁、柱又は基礎の構造計算をする場合」より「床の構造計算をする場合」のほうが大きい。
3. 暴風時における短期に生ずる力は、一般に、固定荷重、積載荷重及び風圧力によって生ずる力の総和である。
4. 積雪荷重は、屋根面の積雪量が不均等になるおそれのある場合、その影響を考慮する。
5. 壁の仕上げの固定荷重は、一般に、「鉄網モルタル塗」より「木ずりしっくい塗」のほうが大きい。

〔N o. 2〕 木造2階建ての建築物に作用する地震力及び風による水平力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 地震力と風による水平力は、一般に、同時に作用しないものとして考える。
2. 地震力は、一般に、固定荷重及び積載荷重が大きいほど大きい。
3. 風による水平力は、積載荷重が大きいほど大きい。
4. 1階に生ずる風による水平力は、2階より大きい。
5. 地震力は、建築物の部材に対して短期に生ずる力として考える。

〔N o. 3〕 木造建築物における部材の名称とそれを使用する部位等との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 登り淀^{よど} ————— 屋根
2. 鏡板 ————— 天井
3. 挟み束 ————— 小屋組
4. 羽目板 ————— 床組
5. 地貫 ————— 軸組

〔N o. 4〕 木造2階建ての建築物における基礎又は地盤に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。ただし、基礎については構造計算を行わないものとする。

1. 地盤の凍結のおそれのない地域であったので、布基礎の根入れ深さを180 mmとした。
2. 基礎断熱工法を採用したので、床下換気孔を設けなかった。
3. 基礎杭を鋼管杭としたので、杭の肉厚は、6 mm以上、かつ、杭の直径の $\frac{1}{100}$ 以上とした。
4. 布基礎の底盤の幅を、地盤の長期許容応力度に応じて定めた。
5. 布基礎の立上り部分の高さを、地上部分で400 mmとした。

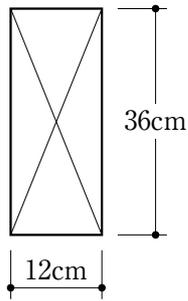
〔N o. 5〕 木造軸組工法による2階建ての建築物における土台又はアンカーボルトに関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. 柱の断面寸法を120 mm×120 mmとしたので、土台の断面寸法を120 mm×120 mmとした。
2. 短期許容耐力20 kNの引寄せ金物(ホールダウン金物)をアンカーボルトで基礎に緊結するので、コンクリートへのアンカーボルトの埋込み長さを200 mmとした。
3. 土台切れの箇所に、アンカーボルトを設置した。
4. 筋かいを設けた耐力壁部分に用いるアンカーボルトは、筋かい両端の柱の下部に近接した位置に設置した。
5. アンカーボルトの土台への締付けに当たり、アンカーボルトの先端は、土台の上端において、ナットからねじが3山以上突き出るようにした。

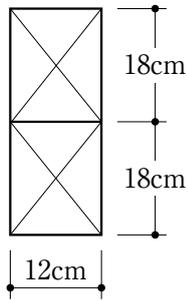
〔N o. 6〕 木造軸組工法による2階建ての建築物における柱又は横架材に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. 2階床梁や胴差には、一般に、マツなどが適している。
2. 鉛直荷重により曲げを受ける床梁は、その中央部付近の下側に引張応力が生じる。
3. 隅柱を通し柱としない場合、上下階の管柱相互を引寄せ金物等で適切に補強しなければならない。
4. 親柱は、床の荷重を支える構造耐力上主要な部材である。
5. 頭つなぎは、柱上部をつなぐ部材であり、屋根の荷重を受けない。

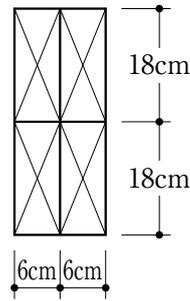
[No. 7] 図のような断面を有する製材(木材)の梁A～Dに鉛直力が作用するときの曲げ強さの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての梁の材質、支持条件及びスパンは同一とし、梁B～Dを構成する部材はそれぞれ相互に接合されていないものとする。



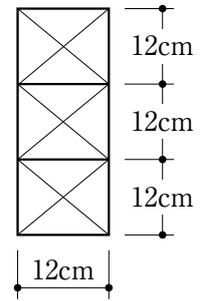
A



B



C

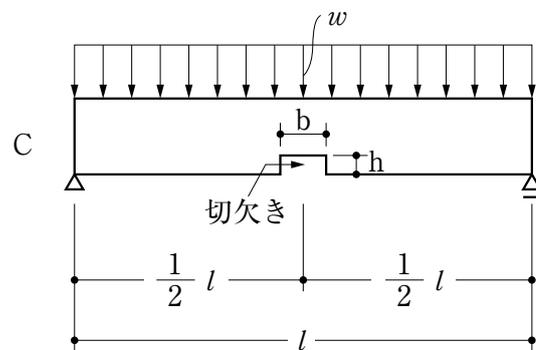
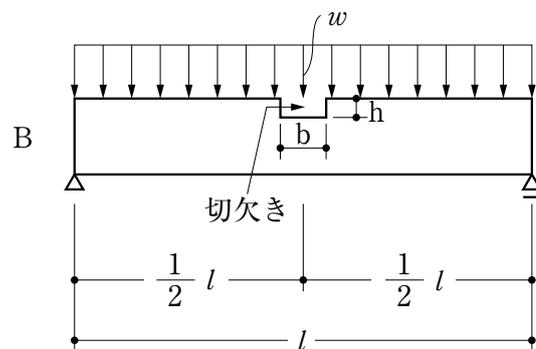
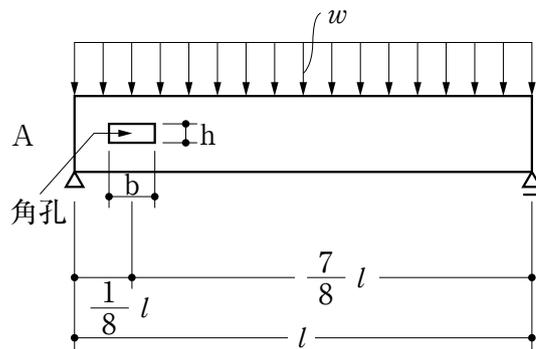


D

1. $A = B = C = D$
2. $A > B = C > D$
3. $A = B > C > D$
4. $A > C > D > B$
5. $D > C > A = B$

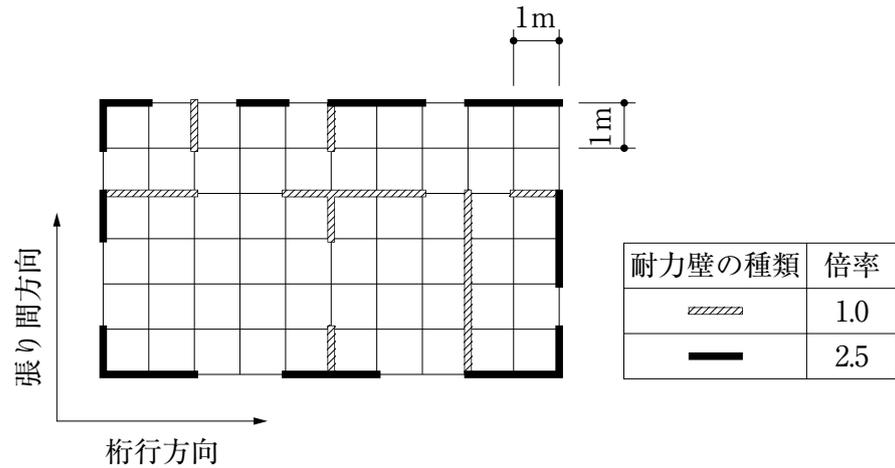
[No. 8] 等分布荷重 w を受ける製材(木材)の梁(等質で等断面とする。)において、図のようにスパンに角孔又は切欠きを設けた場合、梁 A~C の曲げモーメントに対する強さの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、角孔及び切欠きの形状・寸法は、いずれも「 $b : \frac{1}{10} l$ 、 $h : \text{梁せいの} \frac{1}{4}$ 」とし、梁の自重は無視するものとする。

1. $A > B > C$
2. $A = B > C$
3. $B > C > A$
4. $C > A = B$
5. $C > A > B$



[No. 9] 図のような平面形状を有する木造住宅の張り間方向の壁量(存在壁量)として、正しいものは、次のうちどれか。

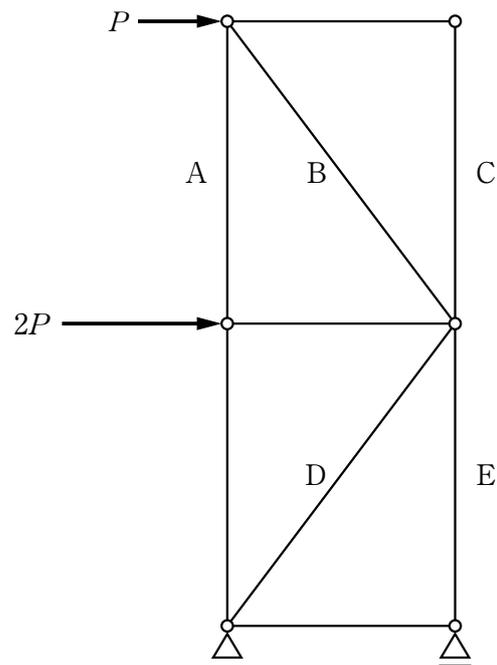
1. 14 m
2. 18 m
3. 23 m
4. 32 m
5. 36 m



[No. 10] 木造軸組工法による2階建ての建築物の耐力壁に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 片面に構造用合板を釘打ち張りし、軸組内にたすき掛け筋かいを設けた耐力壁について、耐力壁の倍率の合計が7を超えた場合、その倍率は7を上限としなければならない。
2. 同じ耐力壁線内の筋かいは、傾きの方向が同じ向きとなるように配置する。
3. 筋かいをたすき掛けにするために、やむを得ず筋かいを欠き込む場合は、必要な補強を行う。
4. 壁長910mmの筋かいについて、土台・桁等の横架材の上端の相互間の垂直距離が3.2mを超える場合は、筋かいの倍率を適切に低減する必要がある。
5. 所定の仕様を満たす垂れ壁・腰壁等は、存在壁量に算入することができる。

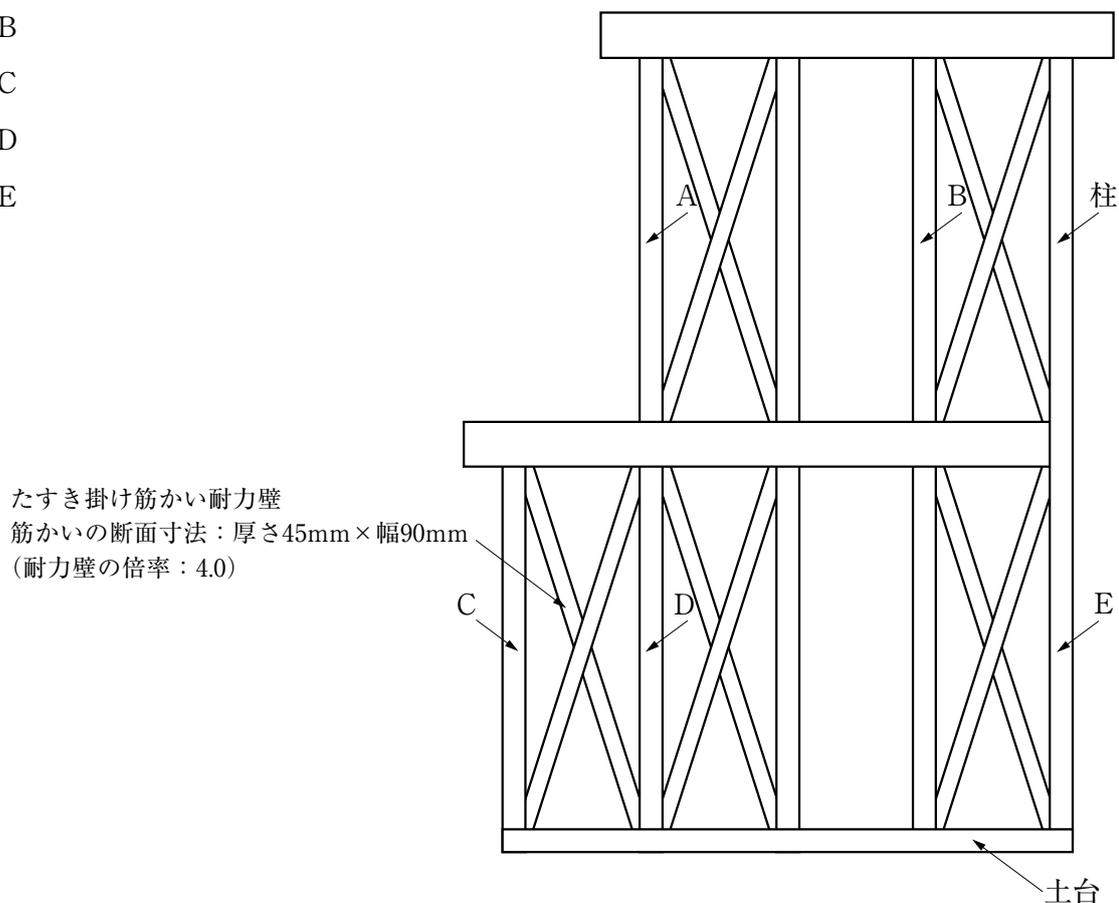
[No. 11] 図のような水平力 P 及び $2P$ が作用する軸組の部材A～Eについて、部材に生じる軸力に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。



1. 部材Aには、引張力が生じる。
2. 部材Bには、圧縮力が生じる。
3. 部材Cには、圧縮力が生じる。
4. 部材Dには、引張力が生じる。
5. 部材Eには、圧縮力が生じる。

〔No. 12〕 図のような2階建ての木造建築物の耐力壁の配置において、水平力を受けたときに柱A～Eの脚部に生じる引抜き力が最も大きいものは、次のうちどれか。ただし、図中の各部材の接合部には、必要な金物を使用されているものとし、たすき掛け筋かい耐力壁はいずれも倍率を4.0とする。

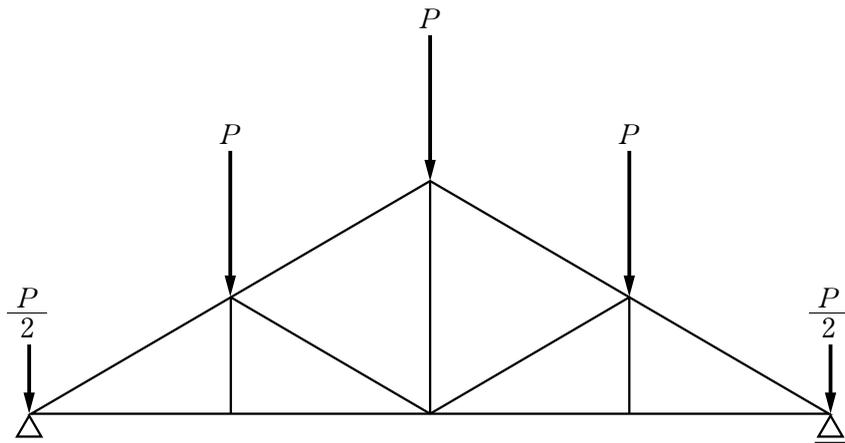
1. A
2. B
3. C
4. D
5. E



〔No. 13〕 木造建築物の小屋組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 和小屋は、小屋梁の上に小屋束を立て屋根荷重を支える構造であり、小屋梁のスパンが大きくなると、曲げモーメントは大きくなる。
2. 洋小屋は、比較的断面の小さな部材を組み合わせてトラスを構成する形式であり、スパンが大きな倉庫などに用いられる。
3. クィーンポストトラスとは、対束小屋組と呼ばれ、小屋裏に物置などを設ける場合や、腰折れ屋根などに用いられる洋小屋組である。
4. 京呂組は、軒桁に小屋梁をかける方式であり、柱の位置にかかわらず小屋梁を配置することができる。
5. 振れ隅木とは、勾配の異なる屋根面が取り合う部分にできる稜線りょうせんに用いられる隅木であり、軒桁に対して45度をなす。

[No. 14] 図のような荷重が作用する小屋組(洋小屋組)に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。



1. 陸梁^{ろく}には、引張力が作用する。
2. 真束には、引張力が作用する。
3. 吊束^{つり}には、引張力が作用する。
4. 方づえには、圧縮力が作用する。
5. 合掌には、圧縮力が作用する。

[No. 15] 木造軸組工法の建築物の2階床組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 根太を用いず、床梁を910 mm間隔に配置した床組であったので、厚さ24 mmの構造用合板をCN75釘を用いて四周釘打ち張りした。
2. 床組を補強するために、断面寸法90 mm×90 mmの木製の火打梁を用い、横架材との仕口は傾ぎ大入れとし、M12の六角ボルトにより留め付けた。
3. 厚さ24 mmのスギの挽板^{ひき}を床下地材としたので、主要な横架材が交わる部分に火打梁を設けた。
4. 床梁については、その両端部を受ける横架材との仕口に、羽子板ボルトを用いた。
5. 床梁の間隔が1,820 mmであったので、根太の断面寸法を幅45 mm×せい60 mmとした。

[No. 16] 枠組壁工法による2階建ての建築物に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、構造計算は行わないものとする。

1. 長さ6mの耐力壁線に、幅4mの開口部を設けた。
2. 耐力壁線相互の距離を12mとし、耐力壁線により囲まれた部分の水平投影面積を40m²とした。
3. たて枠と上枠とをCN90釘2本を用いて緊結した。
4. 径12mm、長さ400mmのアンカーボルトを4m間隔に配置し、かつ、建築物の隅角部と土台の継手部分に配置した。
5. 屋根を構成する垂木相互の間隔を455mmとし、屋根下地材として、JASに適合する1～3級の構造用パネルを用いた。

[No. 17] 木造軸組工法による2階建ての建築物の構造計画に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 2階の耐力壁と1階の耐力壁とを、市松状になるように配置した。
2. 四分割法における壁率比が0.4であったので、各側端部分の壁量充足率が1を超えることを確認した。
3. 通し柱に横架材を取り付けるに当たり、所要断面積の4割を欠き取ったので、当該部分を補強した。
4. 地震時における建築物の平面的なねじれや折れ、はらみを防止するために、耐力壁を釣合いよく配置するとともに、床組の面内剛性を高くした。
5. 建築物の外周に接して吹抜けを設けたので、その部分の胴差の断面を小さくした。

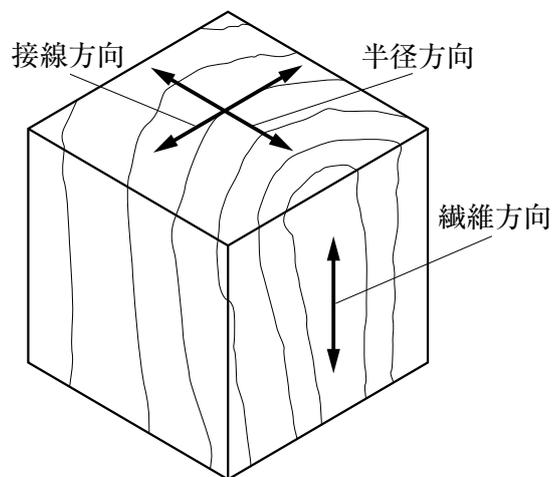
[No. 18] 木造軸組工法による2階建ての既存建築物の耐震性を向上させる方法として、一般に、最も効果の低いものは、次のうちどれか。

1. 耐力壁を構成する柱の劣化部分を根継ぎにより交換し、当該接合部を接合金物で補強した。
2. 耐力壁が設置された下屋の屋根下地材を、小幅板から構造用合板に張り替えた。
3. 1階床組の大引きを支持する床束の設置間隔を小さくした。
4. 無筋コンクリート造の布基礎であったので、これに鉄筋コンクリート造の布基礎を抱き合わせて補強した。
5. 2階建ての建築物を平家建ての建築物に減築した。

[No. 19] 木造建築物の各部における鉛直荷重による力の流れとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 1階床荷重(束立て床)
床板 → 根太 → 大引 → 床束 → 束石
2. 1階天井荷重
天井板 → 野縁受 → 野縁 → 吊木受 → 吊木 → 梁
3. 2階床荷重(杵組壁工法)
床材 → 床根太 → 頭つなぎ → 上枳 → たて枳 → 下枳
4. 屋根荷重(和小屋寄棟)
野地板 → 配付け垂木 → 隅木 → 母屋 → 小屋束 → 飛梁 → 軒桁
5. 屋根荷重(洋小屋)
野地板 → 垂木 → 母屋 → 合掌 → 陸梁 → 敷桁 → 柱

[No. 20] 図のような立方体の木材が乾燥して収縮する場合、繊維方向、半径方向及び接線方向の収縮率の比として、最も適切なものは、次のうちどれか。



1. 繊維方向：半径方向：接線方向 = 1 : 2 : 20
2. 繊維方向：半径方向：接線方向 = 1 : 10 : 20
3. 繊維方向：半径方向：接線方向 = 1 : 20 : 10
4. 繊維方向：半径方向：接線方向 = 10 : 2 : 1
5. 繊維方向：半径方向：接線方向 = 20 : 10 : 1

〔N o. 21〕 木材の一般的な性質に関する次の記述のうち、**最も不適當なもの**はどれか。

1. 実大材の木材の繊維方向の曲げ、引張り、圧縮、せん断、めり込みの基準強度の大小関係は、一般に、曲げ > 引張り > 圧縮 > せん断 > めり込みである。
2. 木材のクリープ変形を考慮した梁の変形増大係数は、一般に、2である。
3. 土台の長期のめり込みの許容応力度は、当該土台のめり込みによって、他の部材の応力に変化が生じる場合と生じない場合とでその値は異なる。
4. 木材の断面が大きいと、燃焼部分に形成される炭化層により、燃焼速度は、深部に進むほど遅くなる。
5. 気乾状態の質量が 575 g、全乾状態の質量が 500 gの木材の気乾状態のときの含水率は、15 % である。

〔N o. 22〕 木造建築物の防腐・防蟻等に関する次の記述のうち、**最も不適當なもの**はどれか。

1. 木材の腐朽菌は、酸素、温度、水分及び栄養素の全ての条件が満たされた状況下で繁殖する。
2. 床下の防蟻措置において、薬剤による土壌処理を行う場合、布基礎部分周辺及び束石の周囲に行うことが有効である。
3. ヒラタキクイムシは、ラワンなどの広葉樹を食害する。
4. ヒノキやヒバの辺材は、一般に、耐腐朽性・耐蟻性に優れている。
5. 表面塗布による木材への防腐処理は、一般に、加圧式防腐処理に比べて、その効果の継続時間が短い。

〔N o. 23〕 木質材料に関する次の記述のうち、**最も不適當なもの**はどれか。

1. 「単板積層材の日本農林規格」における A 種構造用単板積層材は、主繊維方向に直交する単板を入れないもの、又は、両最外層から 2 枚目のみに直交する単板を配置したものである。
2. 「合板の日本農林規格」における特類の構造用合板は、屋外又は常時湿潤状態となる環境下で使用することができる。
3. 「枠組壁工法構造用製材及び枠組壁工法構造用たて継ぎ材の日本農林規格」における甲種枠組材は、主として高い曲げ性能を必要とする部分に使用する。
4. 木質断熱複合パネルは、製材、集成材等を使用した枠組に構造用合板等を接着剤により複合構成したパネルである。
5. 特定対称異等級構成集成材は、ラミナの品質の構成が中心軸に対して対称であり、かつ、曲げ性能を優先したラミナ構成とした集成材である。

〔No. 24〕 鉄筋コンクリートに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 鉄筋の種類の記事号について、異形棒鋼はSDで示し、その記事号の後ろに、JISで規定された降伏点の平均値(N/mm²)をつけて表す。
2. コンクリートの強度は、材齢と共に上昇し、その上昇速さは、セメントの種類によって異なる。
3. コンクリートの中酸化とは、空気中の二酸化炭素等とコンクリートが反応することによって、コンクリートのアルカリ性が失われる現象のことである。
4. コールドジョイントとは、コンクリートの打継ぎ部分に生じる一体化していない継ぎ目のことである。
5. 普通コンクリートの気乾単位容積質量は、一般に、2.2～2.4 t/m³である。

〔No. 25〕 建築材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 花こう岩(御影石)は、圧縮強度や耐摩耗性が低い。
2. アルミニウムは、鉄と接触すると腐食するので、鉄に亜鉛めっき又はアスファルト塗装などを施す。
3. ステンレス鋼は、主成分である鉄にクロムやニッケルなどを配合した合金であり、炭素鋼に比べて耐火性や溶接性が優れている。
4. 合わせガラスは、2枚以上の材料板ガラスで中間膜を挟み、全面接着したものである。
5. 粘土瓦は、耐久性、耐薬品性、耐摩耗性に優れている。

学科Ⅳ（建築施工）

〔No. 1〕 建築工事に関する申請・届とその提出先との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 道路占用許可申請 —— 所轄警察署長
2. 完了検査申請 —— 建築主事等又は指定確認検査機関
3. 建築物除却届 —— 都道府県知事
4. 建築工事届 —— 都道府県知事
5. クレーン設置届 —— 労働基準監督署長

〔No. 2〕 木造2階建て住宅の工事現場における仮設工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 縄張りには、工事監理者が立ち会い、建築主は立ち会わなかった。
2. 遣方やりかたの水杭の頭は、衝撃によるゆがみを容易に発見できるように、矢はずやはずに加工した。
3. 高さが6mの単管足場の解体工事に当たり、作業主任者を選任しなかった。
4. 足場板については、長手方向に支点の上で重ね、その重ねた部分の長さを20cmとした。
5. くさび緊結式足場において、高さ2m以上の場所に作業床を設置するに当たり、墜落防止措置のため、床材と建地(支柱)との隙間を10cmとした。

〔No. 3〕 木造2階建て住宅における土工事・地業工事等に関する次の用語の組合せのうち、最も不適当なものはどれか。

1. 捨てコンクリート地業 —— 墨出し
2. 碎石地業 —— ソイルコンパクター
3. スクリューウエイト貫入試験 —— N値
4. 目つぶし砂利 —— 再生碎石
5. 割栗地業 —— ランマー

〔No. 4〕 木造2階建て住宅における基礎工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 布基礎の立上り部分の上・下主筋はD13とし、フック付きの補助筋と緊結させた。
2. 布基礎の床下防湿措置として床下地面全面に防湿フィルムを敷き詰め、その重ね幅は150 mmとした。
3. べた基礎の立上り部分の地面から基礎上端までの高さを、400 mmとした。
4. べた基礎の立上り部分の厚さを、150 mmとした。
5. アンカーボルトのコンクリートへの埋込み長さを、200 mmとした。

〔No. 5〕 木材の一般的な性質に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. あて材は、狂いが少なく、構造材に適している。
2. 鴨居は、木裏を上端にして使用する。
3. 敷居は、木表を上端にして使用する。
4. 節のある材にかんな削りをする場合は、木表は元口から末口へ、木裏は末口から元口へと削る。
5. 背割りは、心持ち材を柱などに使用するときの見え掛りに、ひび割れを生じにくくするために、樹心までのこ目を入れることである。

〔No. 6〕 木材の木取り等とそれを使用する部位との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 杢目材 ―――― 天井板
2. 二方柱材 ―――― 長押
3. 四方柱材 ―――― 独立柱
4. 絞り丸太 ―――― 小屋梁
5. 四方竹 ―――― 落し掛け

〔N o. 7〕 木造軸組工法における施工順序として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 屋根
棟木・母屋^{もや} → 垂木 → 鼻隠 → 野地板
2. 内壁
胴縁 → 断熱材 → 仕上材 → 枠材の見切り材
3. 2階床組
大梁 → 小梁 → 根太 → 床板
4. 竿縁天井
回り縁^{おち} → 竿縁 → 天井板 → 稲子^{いなこ}
5. 1階床組
土台 → 大引 → 床束 → 根がらみ貫

〔N o. 8〕 木造軸組工法における部材と使用する樹種との一般的な組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 土台 ————— ヒバ
2. 筋かい ———— ヒノキ
3. 根太 ————— スプルース
4. 母屋^{もや} ————— ベイマツ
5. 垂木 ————— スギ

〔N o. 9〕 木造軸組工法における合板等の施工に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 1階及び2階の上下同位置に構造用合板を用いた耐力壁を設けるに当たり、胴差部については、構造用合板相互間に6mmのあきを確保した。
2. 床下地板には、JISに適合するパーティクルボードで、厚さ18mmのものを使用した。
3. 大壁造の壁倍率3.7の構造用合板を用いた耐力壁については、N50釘で外周部を75mm間隔で打ち留めた。
4. 構造用合板を柱、梁等以外の部分で継ぐに当たり、受材の断面寸法を45mm×100mmとした。
5. 構造用合板による床組の補強において、根太、床梁及び胴差の上端高さを同じとしたので、根太の間隔を455mmとした。

〔N o. 10〕 木造軸組工法における各部材の接合部に用いられる継手とその名称との組合せとして、**最も不適当なものは、次のうちどれか。**

1. 胴差 ————— 追掛け大栓継ぎ
2. 小屋梁 ——— 台持ち継ぎ
3. 土台 ————— 腰掛け鎌継ぎ
4. 垂木 ————— ^{いすか} 鶺継ぎ
5. 広小舞 ——— 目違い入れ突付け継ぎ

〔N o. 11〕 木造軸組工法における各部材の接合部に用いられる仕口とその名称との組合せとして、**最も不適当なものは、次のうちどれか。**

1. 小屋梁と軒桁 ————— 大入れかぶと蟻掛け
2. 土台同士の隅角部 ————— えり輸入れ小根ほぞ差し
3. 小屋束と棟木 ————— 長ほぞ差し込み栓打ち
4. 間仕切桁と胴差のT字部 ——— 大入れ蟻掛け
5. 折置組の柱と小屋梁 ————— 二枚ほぞ

〔N o. 12〕 木造軸組工法における各部材の接合部に用いられる金物に関する次の記述のうち、**最も不適当なものはどれか。**

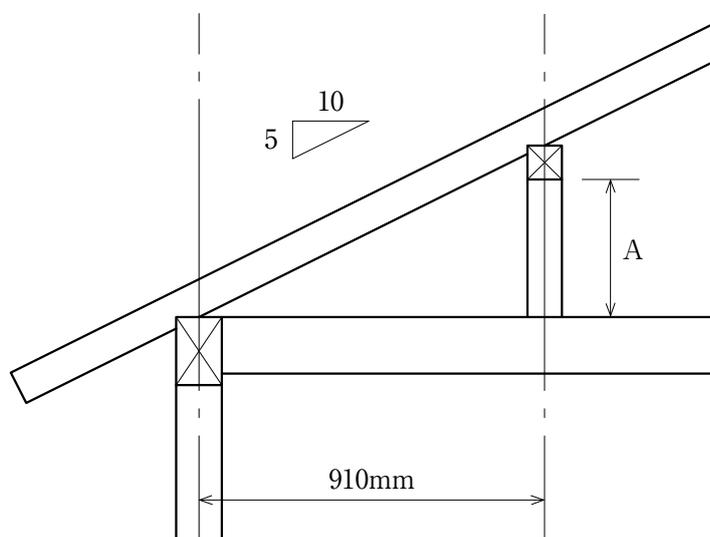
1. 山形プレート(VP)を、管柱と桁との接合に使用した。
2. ホールダウン金物(HD-B)を、柱と基礎との接合に使用した。
3. 折曲げ金物(SF)を、垂木と軒桁との接合に使用した。
4. くら金物(SS)を、小屋梁と軒桁との接合に使用した。
5. コーナー金物(CP・ZS)を、柱と土台との接合に使用した。

[No. 13] 規矩術における「さしがね使い」に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 斜め尺又は角目と呼ばれる目盛りは、表目を $\sqrt{3}$ 倍した目盛りである。
2. 丸目盛りは、一般に、丸目尺又は丸太尺とも呼ばれ、円周の長さを知る目盛りである。
3. 「勾」は「立水」とも呼ばれ、直角三角形の垂線のことである。
4. 「受」は「陸水」とも呼ばれ、直角三角形の底辺のことである。
5. 「玄」は「弦水」とも呼ばれ、直角三角形の斜辺のことである。

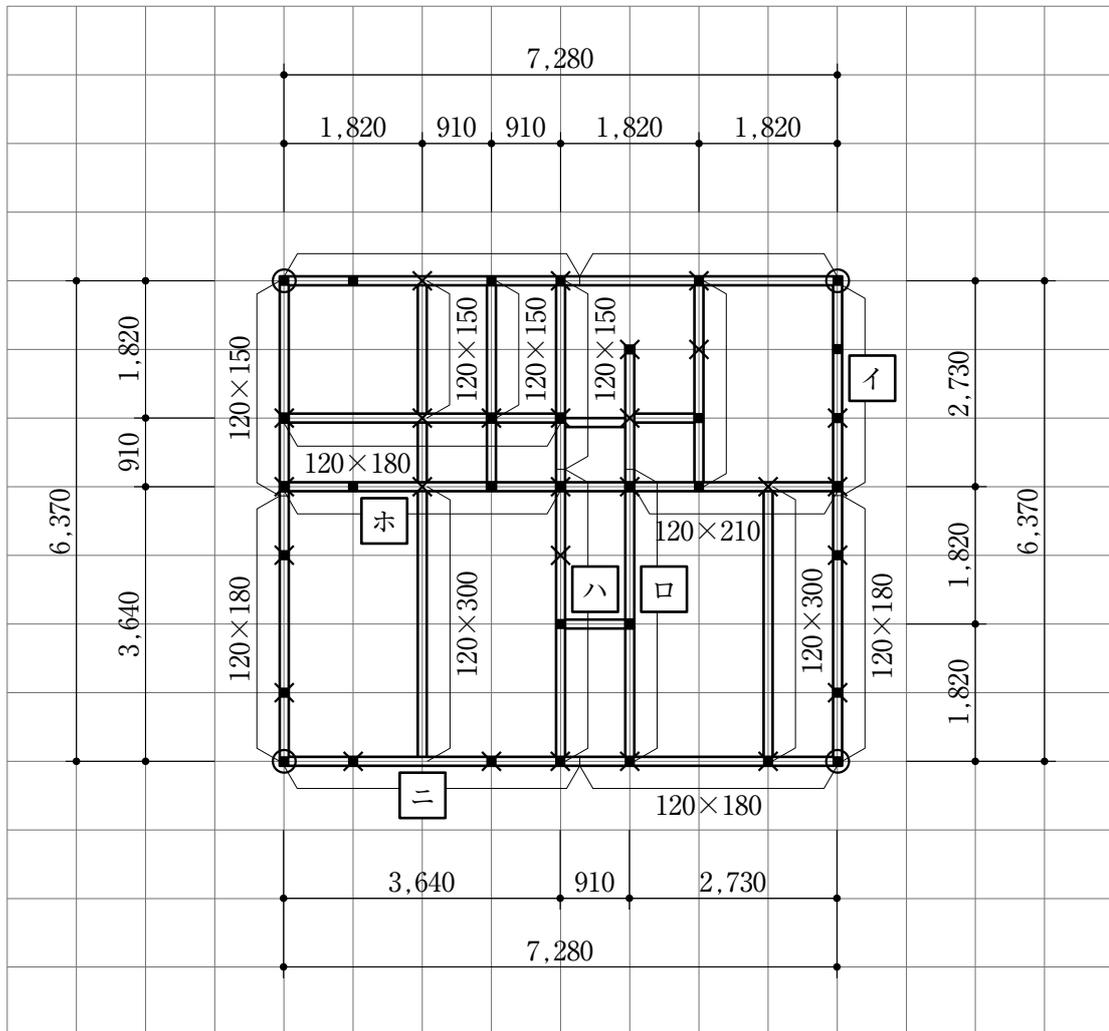
[No. 14] 図のような木造住宅の小屋組におけるAの寸法として、正しいものは、次のうちどれか。

ただし、峠は軒桁上端、母屋上端とし、母屋の断面寸法は90mm×90mmとする。



1. 315 mm
2. 325 mm
3. 350 mm
4. 365 mm
5. 455 mm

[No. 15] 図のような木造2階建て住宅の2階床伏図において、部材イ～ホとその断面寸法(幅mm×せいmm)の組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、建築物は多雪区域以外の一般地域内に建つものとし、根太及び火打梁の表示は省略している。また、使用する木材は無等級材とし、添え梁(枕梁)等はないものとする。

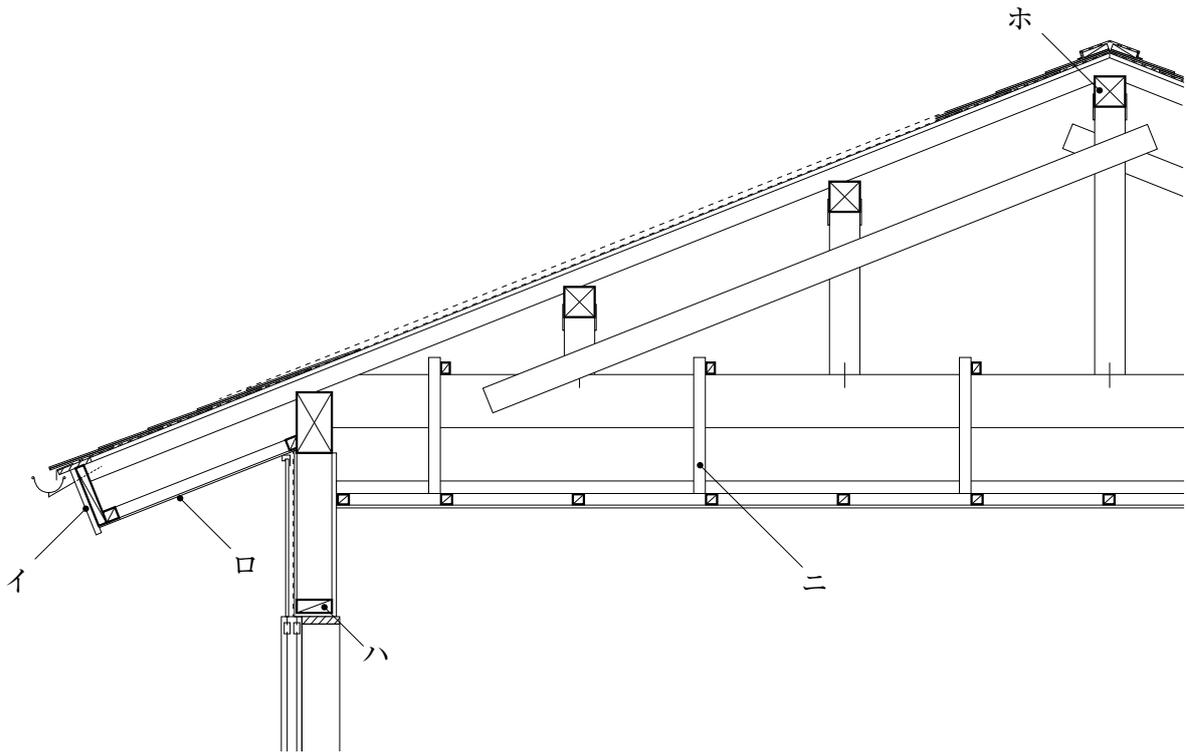


(単位：mm)

凡例	表示記号	通し柱	1階の管柱	2階の管柱	1階と2階が重なる管柱	胴差・2階床梁	
						(正角材)	(平角材)
		●	×	■	⊗	—	—

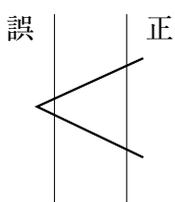
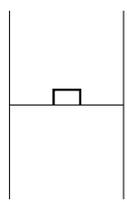
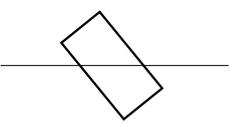
1. イ ————— 120 × 180
2. ロ ————— 120 × 360
3. ハ ————— 120 × 180
4. ニ ————— 120 × 330
5. ホ ————— 120 × 180

[No. 16] 図のような木造住宅の断面詳細図における部材イ～ホの名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



- 1. イ ————— 鼻隠
- 2. ロ ————— 軒天
- 3. ハ ————— 窓台
- 4. ニ ————— 吊木^{つり}
- 5. ホ ————— 棟木

[No. 17] 木工事における部材の墨付けに使用する合印とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	合 印	名 称
1.		にじり印
2.		峠印
3.		心印
4.		鴨居下端印
5.		切り墨印

〔N o. 18〕 木造住宅における屋根工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 住宅屋根用化粧スレート葺板の切断及び孔あけは、押切りカッターにより行った。
2. アスファルトルーフィングの棟部の敷込みは、150 mmの左右折り掛けとし、さらに棟頂部から左右へ一枚ものを増張りした。
3. J形粘土瓦葺き屋根では、瓦の働き寸法を正確に測定し、袖瓦、軒瓦及び棧瓦を、地割りに従い目通り正しく棟まで葺き上げた。
4. 硬質塩化ビニル製の軒どいの取付け勾配を、 $\frac{1}{200}$ とした。
5. 金属板の留付けに用いる釘は、葺板と同系材料のものを使用した。

〔N o. 19〕 木造住宅におけるタイル工事及び左官工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 壁タイルの接着剤張りにおいて、夏期におけるモルタル下地面の乾燥期間を、8日間とした。
2. 壁タイルの改良圧着張りにおいて、タイルの周辺から張付け用モルタルがはみ出さないように、木づちを用いて、たたき締めた。
3. 中塗りに使用するせっこうプラスター塗りの調合において、長さ30 mmの白毛すきを混ぜた。
4. 壁のモルタル塗りにおいて、ラスこすりは、ラスの表面から1 mm程度の厚さに塗り付けた。
5. 壁のモルタル下地ラス張り工法における防水紙の継目は、縦横とも90 mm重ね合わせた。

〔N o. 20〕 木部への塗装工事において通常使用しないものは、次のうちどれか。

1. オイルステイン塗り
2. つや有合成樹脂エマルジョンペイント塗り
3. ラッカーエナメル塗り
4. フタル酸樹脂ワニス塗り
5. アクリル樹脂系非水分散形塗料塗り

〔No. 21〕 木造住宅における内装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. フローリングボードの取付けに用いる釘は、特記がなかったので、板厚の3倍の長さとした。
2. ロールカーペットの保管は、横に倒して、2～3段までの俵積みで静置した。
3. 非耐力壁の合板を壁下地に釘留めするに当たって、へりより10mm内側に釘打ちした。
4. 壁のせつこうボードを突き付けたジョイント部には、ジョイントテープとジョイントコンパウンドを用いて目地処理を行った。
5. 吹付け硬質ウレタンフォームによる断熱材現場発泡工法において、吹付け厚さの許容誤差については、±10mmとした。

〔No. 22〕 木造住宅における設備工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. LPガス(液化石油ガス)のガス漏れ警報設備の検知器は、その下端が床面から上方300mmの位置に取り付けた。
2. 雨水ますには、底部の泥だめの深さが200mmのものを用いた。
3. 汚水ますには、インバートますを用いた。
4. 寒冷地以外の一般敷地内における給水管の地中埋設深さ(土かぶり)は、300mmとした。
5. 給湯管には、架橋ポリエチレン管を用いた。

〔No. 23〕 木工具とその用語との組合せとして、最も関係の少ないものは、次のうちどれか。

1. スコヤ —— 唐尺
2. のみ —— かつら
3. きり —— 四つ目
4. のこぎり —— あさり
5. かな —— こっぱ返し

〔N o. 24〕 建築積算に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 工事中用電気設備に要する費用は、共通仮設費に該当する。
2. 工事原価は、純工事費と現場管理費とを合わせたものをいう。
3. 足場などの仮設工事に係る労務費は、直接工事費に該当する。
4. 工事現場における工事中用機械の搬出入のための輸送費は、直接工事費に該当する。
5. 共通費は、共通仮設費と現場管理費とを合わせたものであり、一般管理費等は含まれない。

〔N o. 25〕 設計図書に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 設計図の内容は、一般に、標準仕様書に優先する。
2. 現場説明書の内容は、一般に、質問回答書に優先する。
3. 仕様書には、一般に、工程表は含まれない。
4. 仕様書には、使用する材料のメーカーを指定することができる。
5. 仕様書は、工事請負契約書類の一部である。

